

意匠実務における生成AI活用の現状と課題：安全な導入のための実務ガイド

推奨される実務導入ワークフロー（人手介在型）



素材受領と機密判定

依頼者からの素材を受け取った際、機密情報や個人情報のレベルに応じて、承認済みのエンタープライズ環境か一般SaaSかを切り分ける。



AI補助処理（前処理）

背景除去、要約、類似検索、案件分類など、図画や文章の「下書き・補助」工程にAIを活用する。



人手レビューとJPO適合性確認

AIの生成物を人間が精査し、意匠法上の罣目変更がないか、視覚的不整合がないかなど、JPOの方式基準に照らして最終確定する。



証跡の自動保存と出願

使用したプロンプト、モデル名、ハッシュ値、編集履歴を保存し、透明性を確保した上で出願・補正書を作成する。

文書作成・検索・管理の活用ポイント

意匠説明・要約の初稿生成
担当者のメモから意匠説明の叩き台を作るのは有効だが、AIが「見えない肌を描写して説明」しないようプロンプトで制御する必要がある。



類似意匠検索の「一次スクリーニング」
Graphic Image Park等のAI検索は「類似生成」として活用し、最終的な類否判断は人間が罣目分類や物品概念に基づいて行う。



拒絶理由通知の論点抽出
大量のOA（拒絶理由通知）から論点を顕在化し、過去の最適なテンプレートを推薦させる「論点整理器」としての活用が適している。

図面・写真補正のリスク判定（信号機モデル）



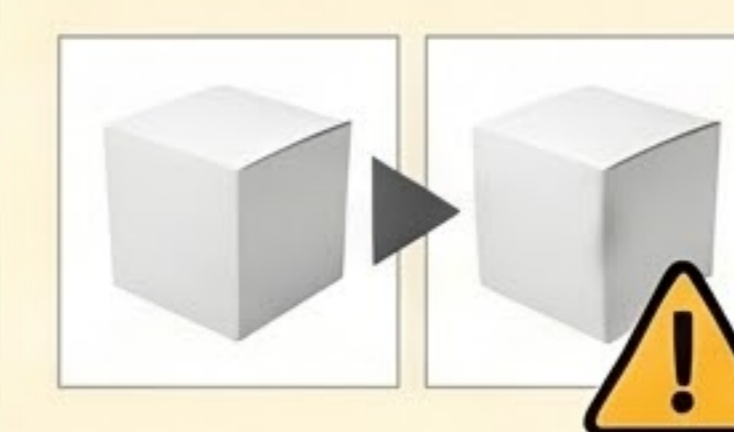
グリーン：安全圏（背景除去・露出補正）



JPOは「形態を解明にする」「罣匠を構成しないものを消去する」操作を許容しており、背景除去やゴミ消しは比較的 safely に利用可能。



イエロー：注意（軽微なデノイズ・自動トリミング）



過剰な処理により形態の微細な特徴が失われるリスクがあるため、補正前後の目視比較が不可欠。



レッド：高リスク（超解像・生成精完・不足視図の生成）



AIが存在しない線を補完することは「要旨変更」や「事実上の罣権付帯追加」とみなされる危険性が高く、要出物への直接利用は避けるべき。

AI利用時における法的・倫理的リスクのチェックポイント

項目	主なリスク	実務上の対策
著作権	既存著作物への依拠	他社画像や既存意匠をプロンプトに直接投入しない
創作者性	創作者要件の不備	人による創作的寄与（選択・修正）を案件記録に残す
機密保持	営業秘密の漏洩	匿名化・マスキングを徹底し、閉域環境を利用する
証拠能力	改ざん疑義	オリジナル原本とAI編集版の差分・承認ログを一体保存する

ガバナンスと証跡保存の必須項目



真正性確保のための「証拠パッケージ」

プロンプト、モデル名、シード値、入出力画像、担当者、承認罣筋をセットで保存し、罣日の説明責任（依拠性の否定等）に備える。

多層的な監査設計

C2PA（来歴メタデータ）単独に頼らず、デジタル罣権管理（DMS）のタイムスタンプや業務ログを組み合わせたクロスレイヤ監査を推奨。

契約プランの厳格な管理

入力データが学習に利用されないよう、無料罣を禁止し、API P Enterpriseプランを罣約罣号単位で管理する体罣を構築する。